

堀河院の二つの池 —堀河院の終焉と池—

<http://www.kyoto-ar.c.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



池B(西から) 池Aは掘削前。

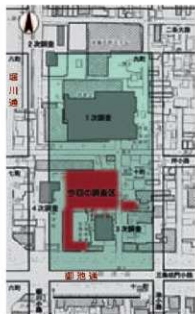
はじめに 次に紹介する池は、調査区の北西部で見つかった三日月形を呈した池Bです。東西約15m、南北約26mあり、調査では池の全体が判明しました。

この池には景石や洲浜はありません。池内部には厚くシルト層が溜まっており、当初から濁々と水をたたえたプールのような池であったと思われます。

池Bを調べる 池底には凹凸がありました。踏み込まれたが、植生によるためとみられます。また池底から完形の土師器皿が出土し

ました。池に沈んだまま底に溜まったのでしょうか。池の南東側は深く掘られていました。この付近は地盤が砂礫層であったため、深く掘ることで地下水が湧き出ることを意図したのでしょうか。池の南岸も砂礫質であるため、粘土が薄く貼られていました。南岸は傾斜がきつく、水を溜める構造となっています。西岸、東岸には薄く粗砂が堆積していました。地上に敷かれた白砂が池に流れ込んだ形跡とみられます。

この池で注目すべきは、池底で



堀河院と調査区配置図



出土した木簡



木簡の出土状況

長方形の掘込みが数箇所見つかったことです。目的ははっきりしませんが、水漏れを防ぐための工事が、地下の地層を調べるための試験掘りではないかと考えられます。

また、堀河院寝殿（ひがわにん）の西対を阿弥陀堂に改造したという記事が『天台座主記』や『長秋記』にあります。池の西側に建物があり、その前面に配置された池であった可能性も考えられます。

出土木簡を読む 池Bに先立って掘られた遺構から、木簡が2点出土しました。1点には「方上」、もう1点には「鉤二丈 一口一丈...」などの文字が判読できました。最初の「方上（かたかみ）」は越前国今立郡（福井県鯖江市付近）にあった荘園の地名です。この荘園は藤原の氏長者（藤原氏の頂点に立った人）に代々伝えられた領地で「殿下遺領」と呼ばれました。もう1つの「鉤（まがひ）」は近江国栗太郡（滋賀県栗東市付近）にあった荘園で、「下鉤（しもまがひ）」の地名が現存しています。

こちらの伝領は少し複雑です。まず、小一条院教明親王の娘で三条天皇の養女となった「冷泉宮」僖子内親王の所領であり、承徳元年（1097）頃には養女の源麗子に譲られました。永久2年（1114）の麗子死去後、孫の藤原忠実に渡り、その後は摂関家（近衛家）に伝領されました。池の造成にあたって、2つの荘園からの資材が充てられたことを示すものでしょう。

堀河院の終焉 池が埋められるのは11世紀後半から12世紀初めとみられます。白河天皇よりも、その次の堀河天皇と中宮篤子が御所とした時代にあたります。

池内のシルト層からは壁土が出土しました。壁土は熱で変質しており、火災があったことを示しています。堀河院は嘉保元年（1094）10月24日と保安元年（1120）4月19日に火災があったことが『百練抄』や『中右記』に記載されています。池の上には整地層が乗っていましたが、前号のリーフレット



木簡が見つかった掘込み

京都No.249で紹介した池Aほど丁寧な整地ではなく、比較的簡単に埋められたようです。また、シルト層からは寄生虫卵も多数見つかりました。これは池に汚水が流れ込むような状況であり、そこに堀河院の終焉する姿が想像できます。

池が埋まった後には井戸が掘られ、13世紀後半の遺物を含んでいました。鎌倉時代に入ると、この場所は村上源氏（久我氏）の手に渡ります。後に曹洞宗の開祖となる道元もここで養育された可能性があり、そのことを記す石碑が京都国際ホテルの中庭に建てられています。（丸川 義広）

※ 出土木簡の判読については、京都大学の西山良平先生と上野勝之氏に御教示いただきました。